

---

デジタルパンク通信 第二十五話

---

Q ビール瓶でしょうか。トックリでしょうか。

A トックリです。

前回の続きだが、そう、看板たたいたり笛ふいたり叫んだりしていた20年前、少年ナイフやどんとたちとまっすぐに走っていたころ、ぼくにできることは音楽だけだった。小さくてもいいけど思いきりやりたかった。オモロイことをしでかして、走って、何かがひっくり返ればいいと思っていた。手元にある手段は音楽だけだった。でも、その先にあるのはプロの世界。業の重さの世界。

そのころ、夜中、みどころのある若いパンクがビール瓶かかえてトボトボ歩いているのに出くわした。シンナーで歯の溶けたモヒカン刈りだ。暗い中ひとりビール瓶を集めて回っている。どうした。「これ酒屋さんに1本10円で引き取ってもらって、それでパン買うねん」。そうまでして、かるうじて、パンかじっている。もうシンナー買うカネもない。そのくせ、ギターだけは手放さないできちんと手入れしている。「オレにはこれしかあらへんもん。」そう言って過激なノイズを出す。それには勝てない。ぼくはそこまで業を負っていない。勝てないと了解したぼくは、音楽をあきらめて別の道を進んだ。ライブのモギリをしながら公務員試験の勉強をして、官僚になった。それも飛び出して今フラフラしている。その間ずっと、音を作って表現している人たちのことを尊敬し続け、ぼくも何かの形で表現したりひっくり返したりしてみたいとフツフツ思い続けている。

20年前のテープを引っ張り出してCDを作った連中が祇園に集まった。トックリを傾けて、熱い酒を飲んだ。ぼくと同じようにプロにならず別方面に進んだ連中だ。それぞれ、別方面で走り続けている。飲みながら連中、「音楽が薄くなった」とつぶやく。80年代から音楽もデジタル化を進めて、気軽に高度なアレンジができるようになった。でも、表現は固定して、大人しくなってきたというのだ。安っぽくてバカだったけど、あのころの方が、熱くなかったか？「あのころの方が、熱かった」。音楽に限らない。どのジャンルでも、オヤジどもが振り返ると必ず出てくるセリフだ。つまり、ぼくらは歳をとった、ということグチっているにすぎない。

それでもいい。加齢をグチるのは年寄りの特権じゃ。だが近頃の年寄りはずちが悪いぞ、もっと年寄りがいっぱい生き残っているから、年寄りの自覚がなく、やたら元気なのじゃよ。いてもうたれ。ひっくり返したれ。そういうパンクな性分が消せずフツフツとしたまま、デジタルに突入してしまった。そしてデジタルは、あれこれひっくり返しはじめた。音楽だけじゃない。ビジネスも、教育も、政治も、ひっくり返しはじめた。熱い気持ちをどこでも発揮できる時が来た。どうやらそのパワーは、はじめから若いデジタル世代の手に委ねられている。そんなことは知っとる。でも、負けない。負けへんど。気持ちの熱さの問題じゃ。

---